

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵 深 主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三 日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我 等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 ん ぢ に き 歸 ず。

【 階梯者イオアンの讃詞 第1調 】

ほうしんなるわがしんぷイオアンよ、な
 捧 神 我 神 父 爾

んぢはののじゅうしゃにしてにくたいにおけるて
 野 住 者 肉 體 於 天

んし およびきせきしゃとあらわれたり。な
 使 及 奇 跡 者 顯 爾

んぢはものいみと、けいせいと、きとうと
 齋 警 醒 祈 禱

をもつててんのおんしをえて、しんをもつて
 以 天 恩 賜 獲 信 以

な んぢに は し り つ く も の の れ い た い の や
 爾 趨 附 者 の 靈 體 の 病
 ま い を い や し た も お う。 こ う え い は な 爾
 醫 給 光 榮 爾
 んぢに ち か ら を あ た え し し ゅ に き し 、 こ う え 榮
 力 與 主 歸 光 榮
 い は な んぢに え い か ん を こ う む ら せ し し ゅ に き
 爾 榮 冠 冠 主 歸
 し 、 こ う え い は な んぢ を も っ て し ゅ う に
 光 榮 爾 以 衆
 い や し を た も う し ゅ に き す 。
 醫 治 賜 主 歸

【 階梯者イオアンのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸
 す 、
 き ょ う ど う し イオア ン、 わ れ ら の し ん ぶ よ 、 し ゅ
 嚮 導 師 我 等 神 父 主
 は な んぢ を ま こ と の せ っ せ い の た か き に 、 う
 爾 眞 節 制 高 動

ごかざるほし、そのひかりをもってしきよくをみ導
 星 其 光 以 四 極 導
 ちびくものとしておきたまえり。
 者 置 給 え り 。

【 復活のコンダク 第8調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 だいじんじなるしゅよ、なんぢははかよりふく
 大 仁 慈 主 爾 墓 復
 かつして、しせしものをおこし、ア
 活 死 者 興
 ダムをふくかつせしめたまえり。エヴァはなん
 復 活 給 え り 。 爾
 ちのふくかつをたのしみ、せかいのはて
 復 活 樂 世 界 極
 はなんぢがしよりおきたるをいわう。
 爾 死 興 祝

【 聖三の歌 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
 主 敬 虔 者 救 及 我

らにききたまえ。
等 聆 給

代禱) ^{よよ} 世世に、

ア ミ ン。

せいなるかみ、せいなるゆうき毅、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき毅、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき毅、
聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
歸 今 何 時 世 世

せ い なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 せ い なる か み、 せ い なる ゆ う
 聖 神 聖 勇
 き、 せ い なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あ わ れ め よ 。
 憐

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 及び克肖者の第7調 】

代禱) ^{つつし} 慎 ^き みて ^{しゅうじん} 聴く ^{へいあん} べし、 衆 人 に 平 安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

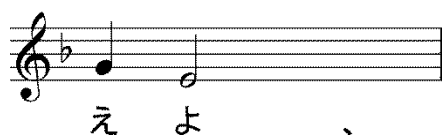
代禱) ^{えいち} 睿 智、

誦經) ^{しゅなんぢら} プロキメン、 主 爾 等 ^{かみ} の 神 ^{ちかい} に ^な 誓 ^{つくの} を 作 して 償 えよ、

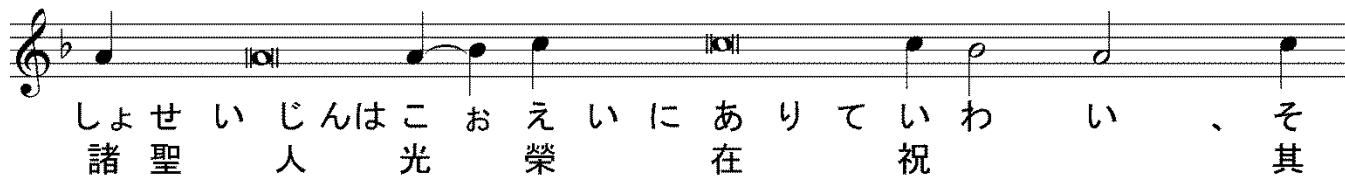
しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つ く の
 主 爾 等 神 誓 作 償
 え よ 、

誦經) ^{かみ} 神 は ^し イウデヤ に 知 ら れ、 ^{そのな} 其 名 は ^{おおい} イズライリ に 大 な り、

しゅ なんぢら の か み に ち か い を な して つ く の
 主 爾 等 神 誓 作 償



誦經) 諸^{しよせいじん} 聖^{こうえい} 人^あ は 光^{いわ} 榮^{そのとこ} に 在^あ りて 祝^{よろこ} い、其^{よろこ} 榻^{よろこ} に 在^{よろこ} りて 歡^{よろこ} ぶべし、



【 使徒經 (アポストロス) 314 端 エウレイ書 6 章 13 節~20 節 】

代禱) 睿^{えいち}智、

誦經) 聖^{せいしと} 使^{じん} 徒^{たつ} パ^{しよ} ヴ^{よみ} ェ^{よみ} ル^{よみ} が エ^{よみ} ウ^{よみ} レ^{よみ} イ^{よみ} 人^{よみ} に 達^{よみ} す^{よみ} る^{よみ} 書^{よみ} の^{よみ} 讀^{よみ}、

代禱) 謹^{つつし} み^き て 聽^き く^き べ^き し、

誦經) 兄^{けいてい} 弟^{かみ} よ、神^{きよやく} は ア^{たま} ヴ^{とき} ラ^{おのれ} ア^{おおい} ム^{もの} に 許^{いつ} 約^さ を 賜^{ちか} う^{ちか} 時^{ちか}、己^{ちか} より 大^{ちか} なる^{ちか} 者^{ちか} の^{ちか} 一^{ちか} も^{ちか} 指^{ちか} して^{ちか} 誓^{ちか} う^{ちか} べ^{ちか} き

なき^{ゆえ} が 故^{おのれ} に、己^さ を 指^{ちか} して^い 誓^い いて^い 云^い え^い り、我^{われ} 必^{かならず} 祝^{しゆくふく} 福^{なんぢ} して^{しゆくふく} 爾^ま を 祝^ま 福^{なんぢ} し、益^ま して^{なんぢ} 爾^{なんぢ}

を 益^ま さ^か んと。斯^ま く^か ア^ま ヴ^か ラ^ま ム^か は 恒^ま 忍^か して、許^ま 約^か せ^ま ら^か れ^ま し^か 所^ま を 獲^ま たり。蓋^ま 人^か は 己^ま より 大^ま

なる^ま 者^か を 指^ま して^か 誓^ま う、且^ま 事^か を 確^ま 證^か す^ま る^か 誓^ま は 彼^ま 等^か の 凡^ま の 争^ま 論^か を 息^ま む、故^ま に 神^ま も 許^ま

約^ま を 嗣^ま ぐ^か 者^ま に、己^ま の 旨^ま の 易^ま ら^か ざる^ま を 更^ま に 明^ま に 示^ま さ^か んと 欲^ま して、別^ま に 誓^ま を 立^ま て^か たり、

斯^ま の 二^か の 易^ま ら^か ざる^ま 者^ま に 於^ま て 神^ま は 謊^ま る^か 能^ま わ^か ざる^ま が 故^ま に、我^ま 等^か 斯^ま の 二^ま の 者^ま を 以^ま て 確^ま

なる^ま 慰^ま を 得^ま ん^か 爲^ま な^か り、蓋^ま 我^ま 等^か は 趨^ま り^か て 我^ま が 前^ま に 在^ま る^か 望^ま を 執^ま る^か 者^ま な^か り。此^ま の 望^ま は 我^ま

等^ま の 靈^ま の 爲^ま に 堅^ま く^か して、動^ま か^か ざる^ま 錨^ま の 如^ま し、且^ま 幔^ま の 内^ま に 入^ま る^か、即^ま イ^ま イ^ま ス^ま が メ^ま ル

キ^ま セ^ま デ^ま ク^ま の 班^ま に 循^ま いて、世^ま 世^ま の 司^ま 祭^ま 長^ま と 爲^ま り^か て、我^ま 等^ま の 爲^ま に 前^ま 驅^ま と して 入^ま り^か し^ま 所^ま な^か り。

(比較用 口語訳) 神がアブラハムに対して約束されたとき、さして誓うのに、ご自分よりも上のものがないので、ご自分をさして誓って、「わたしは、必ずあなたを祝福し、必ずあなたの子孫をふやす」と言われた。このようにして、アブラハムは忍耐強く待ったので、約束のものを得たのである。いった

い、人間は自分より上のものをさして誓うのであり、そして、その誓いはすべての反対論を封じる保証となるのである。そこで、神は、約束のものを受け継ぐ人々に、ご計画の不変であることを、いっそうはっきり示そうと思われ、誓いによって保証されたのである。それは、偽ることのあり得ない神に立てられた二つの不変の事からによって、前におかれている望みを捕えようとして世をのがれてきたわたしたちが、力強い励ましを受けるためである。この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨であり、かつ「幕の内」にはいり行かせるものである。その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。

【 使徒経 (アポストロス) 229 端 エフェス書 5 章 9 節～19 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒 ^{じん たつ} パヴェルが ^{しょ よみ} エフェス人に達する書の讀、

代禱) ^{つつし} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい ひかり こ ごと おこな} 兄弟よ、^{けだしん み およそ じあい こうぎ しんじつ あ なんぢ} 光の子の如く行え。蓋神の實は凡の慈愛と公義と眞實とに在り。爾

^{らかみ よろこ ところ なに つまびらか み むす くらやみ おこない あづか なか} 等神の悦ぶ所の何なるを 審にせよ、實を結ばざる暗昧の行に與る勿れ、

^{むしろこれ せ けだしかれら ひそか おこな こと い または べ およ せ こと} 甯之を責めよ。蓋彼等が隱に行う事は、言うも亦耻づ可し。凡そ責めらるる事は

^{ひかり よ あらわ けだしおよ あらわ こと ひかり ゆえ い い ものお し} 光に由りて顯る、蓋凡そ顯るる事は光なり。故に云えるあり、寐ぬる者起きよ、死

^{ふくかつ なんぢ てら ここ もつ み おこない つつし むち もの ごと} より復活せよ、ハリストス爾を照さん。是を以て視よ、行を慎みて無智の者の如く

^{すなわちち もの ごと とき おし ひ あ こ ゆえ しりよ もの} せず、乃智ある者の如くせよ、時を惜むべし、日は悪しければなり。是の故に思慮なき者

^{な なか すなわちかみ むね なに さと またさけ よ なか こ よ ほうとう} と爲る勿れ、乃神の旨の何なるを覺れ。又酒に酔う勿れ、此れに由りて放蕩あり、

^{すなわちしん み せいせい かしょう ぞくしん しふ もつ くち とな こころ わ} 乃神に満てられよ。聖詠と歌頌と屬神の詩賦とを以て、口に唱え、心に和して、

^{しゅ さんび} 主を讚美せよ。

(比較用 口語訳) 光の子らしく歩きなさい—— 光はあらゆる善意と正義と眞実との実を結ばせるものである—— 主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい。 実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい。 彼らが隠れて行っていることは、口にするだけでも恥づかしい事である。 しかし、光にさらされる時、すべてのものは、明らかになる。 明らかにされたものは皆、光となるのである。 だから、こう書いてある、「眠っている者よ、起きなさい。 死人のなかから、立ち上がりなさい。 そうすれば、キリストがあなたを照すであろう」。 そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようではなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いな

さい。今は悪い時代なのである。だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。

【 アリルイヤ 主日第8調 及び 克肖者の第7調 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

誦經) ^{きた} 来りて ^{しゅ} 主に ^{うた} 歌い、^{かみわ} 神 ^{すくい} 我が ^{かため} 救 ^よ の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

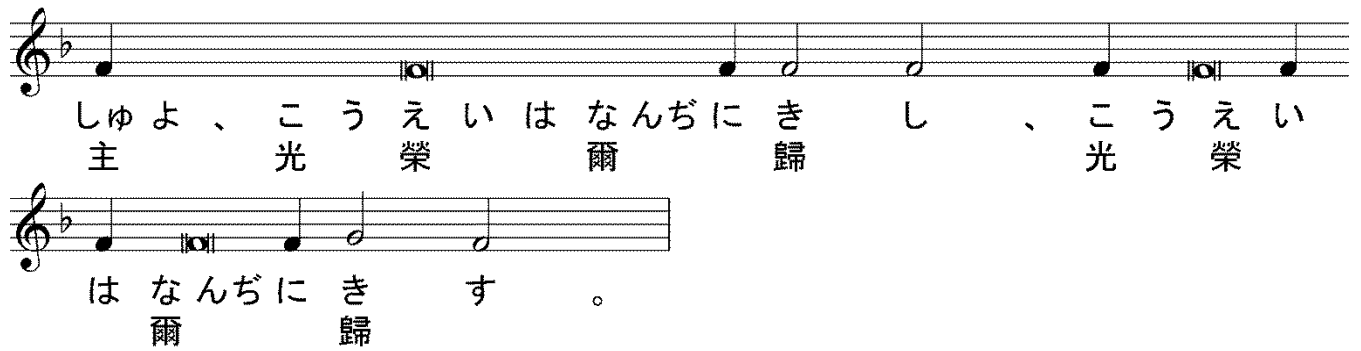
誦經) ^{かれら} 彼等は ^{しゅ} 主の ^{みや} 宮に ^う 植えられて、^わ 我が ^{かみ} 神の ^{にわ} 庭に ^{さか} 榮ゆ、

アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、
ア リル イ ヤ。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書40端 9章17~31節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{でん} マルコ ^{せいふくいんけい} 傳の ^{よみ} 聖福音經の讀、



代禱) ^{つつし} ^き 謹みて聴くべし、

誦経) ^{つつし} ^き 謹みて聴くべし、^か ^{ときあるひと} 彼の時 ^つ 或 ^{ふくはい} ^い 人 ^し イススに ^{われおし} ^き 就きて、^よ 伏 ^し 拜して ^き 曰えり、^よ 師よ、^よ 我 ^よ 瘡の ^よ 鬼に ^よ 憑

られたる ^わ ^こ ^{なんぢ} ^{たづさ} ^{きた} 我が子を ^き ^{いづこ} ^{かれ} ^{とら} 爾に ^な ^{たお} 攜え ^{かれあわ} ^ふ 來れり。鬼は何處に ^ふ 彼を ^ふ 執うとも、^ふ 投げ ^ふ 仆し、^ふ 彼 ^ふ 沫を ^ふ 噴き、

は ^か ^{からだか} ^{われなんぢ} ^{もんと} ^{これ} ^{おい} 齒を ^こ ^{かれら} ^{あた} 切み、^こ 體 ^こ 枯る、^こ 我 ^こ 爾 ^こ の ^こ 門徒 ^こ に ^こ 之 ^こ を ^こ 逐 ^こ い ^こ 出 ^こ だ ^こ さん ^こ こと ^こ を ^こ 請 ^こ いた ^こ れ ^こ ども、^こ 彼 ^こ 等 ^こ 能 ^こ わ ^こ ざ ^こ り

き。 ^{かれ} ^{こた} ^{いわ} ^{ああしん} ^よ ^{われいつ} ^{なんぢら} ^{とも} ^あ ^{いつ} イスス ^あ 彼 ^あ に ^あ 答 ^あ えて ^あ 曰 ^あ く、^あ 噫 ^あ 信 ^あ な ^あ き ^あ 世 ^あ や、^あ 我 ^あ 何 ^あ 時 ^あ ま ^あ だ ^あ か ^あ 爾 ^あ 等 ^あ と ^あ 偕 ^あ に ^あ 在 ^あ ら ^あ ん、^あ 何 ^あ 時 ^あ ま ^あ だ ^あ か ^あ 爾 ^あ 等 ^あ を ^あ 忍 ^あ ば ^あ ん、^あ 彼 ^あ を ^あ 我 ^あ が ^あ 許 ^あ に ^あ 攜 ^あ え ^あ 來 ^あ れ。 ^あ 乃 ^あ 彼 ^あ を ^あ 攜 ^あ え ^あ 來 ^あ れり、^あ 彼 ^あ イ ^あ ス ^あ ス ^あ を ^あ 見 ^あ れ

は、^{なんぢら} ^{しの} ^{かれ} ^わ ^{もと} ^{たづさ} ^{きた} 爾 ^す 等 ^な を ^な 忍 ^な ば ^な ん、^な 彼 ^な を ^な 我 ^な が ^な 許 ^な に ^な 攜 ^な え ^な 來 ^な れ。 ^な 乃 ^な 彼 ^な を ^な 攜 ^な え ^な 來 ^な れり、^な 彼 ^な イ ^な ス ^な ス ^な を ^な 見 ^な れ

ば、^{きた} ^{ちま} ^{ちかれ} ^{ひきつけ} ^{かれ} ^ち ^{たお} ^{まる} ^{あわ} ^ふ 鬼 ^{その} ^{ちち} ^と 忽 ^{かれ} 彼 ^{かれ} を ^{かれ} 拘 ^{かれ} 攣 ^{かれ} させ、^{かれ} 彼 ^{かれ} 地 ^{かれ} に ^{かれ} 仆 ^{かれ} れ ^{かれ} 輒 ^{かれ} び ^{かれ} て ^{かれ} 沫 ^{かれ} を ^{かれ} 噴 ^{かれ} けり。 ^{かれ} イ ^{かれ} ス ^{かれ} ス ^{かれ} 其 ^{かれ} 父 ^{かれ} に ^{かれ} 問 ^{かれ} えり、^{かれ} 彼 ^{かれ} に

か ^な ^{いづれ} ^{とき} ^い ^{おきな} ^{とき} 斯 ^き く ^き 爲 ^き り ^き し ^き は ^き 何 ^き の ^き 時 ^き より ^き か。 ^き 曰 ^き えり、^き 幼 ^き き ^き 時 ^き より ^き な ^き り。 ^き 鬼 ^き は ^き 彼 ^き を ^き 滅 ^き さん ^き 爲 ^き に、^き 屢 ^き 火 ^き

に ^{また} ^{みづ} ^{とう} 又 ^{なんぢ} ^も ^{なに} ^{よく} ^{われら} ^{あわれ} ^{われら} ^{たす} 水 ^{これ} に ^{これ} 投 ^{これ} じ ^{これ} たり。 ^{これ} 爾 ^{これ} 若 ^{これ} し ^{これ} 何 ^{これ} を ^{これ} か ^{これ} 能 ^{これ} せ ^{これ} ば、^{これ} 我 ^{これ} 等 ^{これ} を ^{これ} 憫 ^{これ} み ^{これ} て、^{これ} 我 ^{これ} 等 ^{これ} を ^{これ} 助 ^{これ} け ^{これ} よ。 ^{これ} イ ^{これ} ス ^{これ} ス ^{これ} 之 ^{これ}

に ^い ^{なんぢ} ^も ^{いく} ^{ばく} ^{しん} ^{よく} ^{しん} ^{もの} ^{よく} ^{どう} ^じ ^{ちち} 謂 ^{どう} えり、^{どう} 爾 ^{どう} 若 ^{どう} し ^{どう} 幾 ^{どう} 何 ^{どう} か ^{どう} 信 ^{どう} ず ^{どう} る ^{どう} こと ^{どう} を ^{どう} 能 ^{どう} せ ^{どう} ば、^{どう} 信 ^{どう} ず ^{どう} る ^{どう} 者 ^{どう} には ^{どう} 能 ^{どう} せ ^{どう} ざ ^{どう} る ^{どう} こと ^{どう} な ^{どう} し。 ^{どう} 童 ^{どう} 子 ^{どう} の ^{どう} 父 ^{どう}

ただ ^{ただ} ^ち ^な ^み ^だ ^た ^よ ^い ^{しゅ} ^{われ} ^{しん} ^わ ^ふ ^{しん} ^た ^す 直 ^た に ^た 涙 ^た を ^た 垂 ^た れ ^た て、^た 呼 ^た び ^た て ^た 曰 ^た えり、^た 主 ^た よ、^た 我 ^た 信 ^た ず、^た 我 ^た が ^た 不 ^た 信 ^た を ^た 助 ^た け ^た よ。 ^た イ ^た ス ^た ス ^た 民 ^た の ^た 趨 ^た せ

あ ^あ ^つ ^ま ^み ^お ^き ^い ^{まし} ^{これ} ^い ^お ^し ^み ^み ^{しい} ^き ^{われ} ^{なん} ^ぢ ^め ^い ^{かれ} 集 ^あ る ^あ を ^あ 見 ^あ て、^あ 汚 ^あ 鬼 ^あ を ^あ 禁 ^あ め ^あ て、^あ 之 ^あ に ^あ 謂 ^あ えり、^あ 瘡 ^あ に ^あ して ^あ 聾 ^あ なる ^あ 鬼 ^あ よ、^あ 我 ^あ 爾 ^あ に ^あ 命 ^あ ず、^あ 彼 ^あ よ

り ^い ^ふ ^た ^た ^び ^{かれ} ^い ^な ^か ^き ^さ ^け ^は ^な ^は ^だ ^{かれ} ^ひ ^き ^つ ^け ^い ^{かれ} ^し 出 ^い で ^い て、^い 再 ^い 彼 ^い に ^い 入 ^い る ^い 勿 ^い れ。 ^い 鬼 ^い 號 ^い び ^い て、^い 甚 ^い しく ^い 彼 ^い を ^い 拘 ^い 攣 ^い させて ^い 出 ^い たり、^い 彼 ^い は ^い 死 ^い せ

し ^{もの} ^{ごと} ^お ^お ^{もの} ^{かれ} ^し ^い ^{いた} ^そ ^の ^て ^と ^{かれ} ^お ^こ 者 ^{もの} の ^{もの} 若 ^{もの} くなり ^{もの} て、^{もの} 多 ^{もの} くの ^{もの} 者 ^{もの} 彼 ^{もの} 死 ^{もの} せ ^{もの} り ^{もの} と ^{もの} 云 ^{もの} う ^{もの} に ^{もの} 至 ^{もの} れ ^{もの} り。 ^{もの} イ ^{もの} ス ^{もの} ス ^{もの} 其 ^{もの} 手 ^{もの} を ^{もの} 執 ^{もの} り ^{もの} て、^{もの} 彼 ^{もの} を ^{もの} 起 ^{もの} し

た ^{かれ} ^す ^な ^わ ^ち ^た ^い ^え ^い ^{とき} ^{その} ^{もの} ^と ^ひ ^そ ^か ^{かれ} ^と ^{われ} ^ら ^{これ} ^お れば、^た 彼 ^た 即 ^た 立 ^た たり。 ^た イ ^た ス ^た ス ^た 家 ^た に ^た 入 ^た り ^た し ^た 時 ^た 、^た 其 ^た 門 ^た 徒 ^た 私 ^た に ^た 彼 ^た に ^た 問 ^た えり、^た 我 ^た 等 ^た が ^た 之 ^た を ^た 逐

い ^い ^{あた} ^{なん} ^ゆ ^え ^{かれ} ^い ^き ^{とう} ^{もの} ^い ^み ^よ ^こ ^た ^ぐ ^い ^い 出 ^い だ ^い す ^い 能 ^い わ ^い ざ ^い り ^い し ^い は ^い 何 ^い の ^い 故 ^い ぞ。 ^い 彼 ^い 曰 ^い えり、^い 祈 ^い 禱 ^い と ^い 齋 ^い と ^い に ^い 由 ^い ら ^い ざ ^い れ ^い ば、^い 此 ^い の ^い 類 ^い は ^い 出 ^い づ ^い る

を ^え ^{かれ} ^ら ^か ^し ^こ ^い ^す ^{かれ} ^ひ ^と ^{これ} ^し ^ほ ^つ 得 ^え ざる ^え な ^え り。 ^え 彼 ^え 等 ^え 彼 ^え 處 ^え を ^え 出 ^え て、^え ガ ^え リ ^え レ ^え ヤ ^え を ^え 過 ^え ぐ、^え 彼 ^え は ^え 人 ^え の ^え 之 ^え を ^え 知 ^え ら ^え ん ^え こと ^え を ^え 欲 ^え せ ^え ざ ^え り ^え き。

け ^け ^だ ^し ^{その} ^{もの} ^と ^お ^し ^{ひと} ^こ ^{ひと} ^び ^と ^て ^{わた} ^{ひと} ^び ^と ^{かれ} ^こ ^ろ ^こ ^ろ ^の ^ち ^{かれ} ^{だい} 蓋 ^け 其 ^け 門 ^け 徒 ^け に ^け 教 ^け えて、^け 人 ^け の ^け 子 ^け には ^け 人 ^け 人 ^け の ^け 手 ^け に ^け 付 ^け され、^け 人 ^け 人 ^け 彼 ^け を ^け 殺 ^け し、^け 殺 ^け されて ^け 後 ^け 彼 ^け 第

さんじつ ふくかつ い
三日に復活せんと曰えり。

(比較用 口語訳) 群衆のひとりが答えた、「先生、おしの霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。霊がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださいのように願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。そこで人々は、その子をみもとに連れてきた。霊がイエスを見るや否や、その子をひきつけさせたので、子は地に倒れ、あわを吹きながらころげまわった。そこで、イエスが父親に「いつごろから、こんなになったのか」と尋ねられると、父親は答えた、「幼い時からです。霊はたびたび、この子を火の中、水の中に投げ入れて、殺そうとしました。しかしできますれば、わたしどもをあわれんでお助けください」。イエスは彼に言われた、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」。その子の父親はすぐ叫んで言った、「信じます。不信仰なわたしを、お助けください」。イエスは群衆が駆け寄って来るのをごらんになって、けがれた霊をしかって言われた、「おしとつんぼの霊よ、わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度と、はいつて来るな」。すると霊は叫び声をあげ、激しく引きつけさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの人、死んだのだと言った。しかし、イエスが手を取って起されると、その子は立ち上がった。家にはいられたとき、弟子たちはひそかにお尋ねした、「わたしたちは、どうして霊を追い出せなかったのですか」。すると、イエスは言われた、「このたぐいは、祈りによらなければ、どうしても追い出すことはできない」。それから彼らはそこを立ち去り、ガリラヤをと行って行ったが、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは、イエスが弟子たちに教えて、「人の子は人々の手にわたされ、彼らに殺され、殺されてから三日の後によみがえるであろう」と言っておられたからである。

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 10 章 4 章 25～5 章 12 節 】

代禱)彼の時、ガリラヤ、デカポリ、イエルサリム、イウデヤ、イオルダンの外より衆くの民彼に 従えり。イイス 群衆を見て、山に登れり、既に坐せしに、其門徒彼に就けり。彼口を啓きて、之を教えて曰えり、神の貧しき者は 福なり、天國は彼等の有なればなり。泣く者は 福なり、彼等慰を得んとすればなり。溫柔なる者は 福なり、彼等地を嗣がんとすればなり。義に飢え 渴く者は 福なり、彼等飽くを得んとすればなり。矜恤ある者は 福なり、彼等矜恤を得んとすればなり。心の清き者は 福なり、彼等神を見んとすればなり。和平を行う者は 福なり、彼等神の子と名づけられんとすればなり。義の爲に窘逐せらるる者は 福なり、天國は彼等の有なればなり。人我の爲に爾等を詬り、窘逐し、爾等の

こと いつわ もろもろ あ ことば い とき なんぢらさいわい よろこ たのし てん
事を諷りて 諸の悪しき言を言わん時は、爾等福なり、喜び樂めよ、天には

なんぢら むくいおお
爾等の賞多ければなり。

(比較用 口語訳) こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ及びヨルダンの向こうから、おびたしい群衆がきてイエスに従った。イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。わたしのために人々があなたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※代式祈祷③ へ